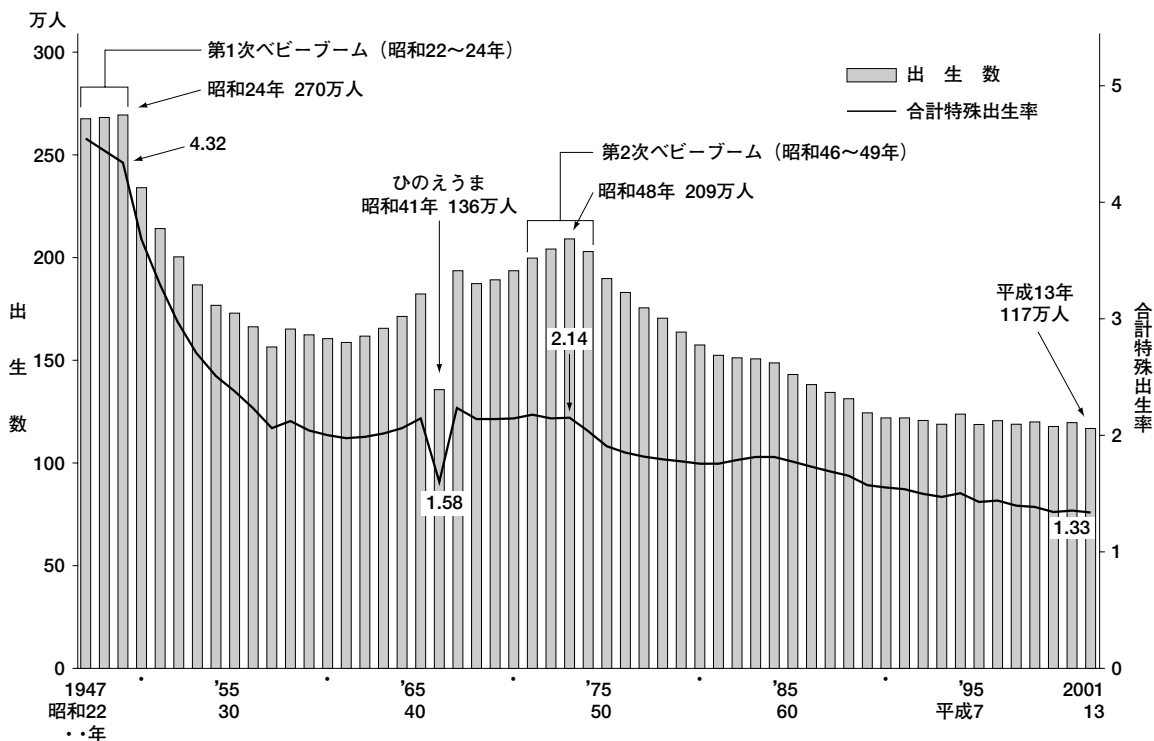


資料室

501 人口動態(3)

出生の動き

出生数と合計特殊出生率の推移



平成13年の出生数は、117万662人で前年より1万9,885人減少した。出生数の年次推移をみると、昭和22年から24年は、戦争直後における結婚の増加により第1次ベビーブームが起こった時期であり、出生数は毎年260万人台と多く、合計特殊出生率も4を超えていたが、20年代後半は、出生数、合計特殊出生率ともに急速に下降をたどり、昭和31年には合計特殊出生率が2.22となり、はじめて人口置換水準（同年2.24）を下回った。

その後、46年にかけては、「ひのえうま」前後の特殊な動きを除けば、合計特殊出生率は緩やかな上昇傾向にあり出生数は、昭和30年代はほぼ160万人台で横ばいであったが、40年代に入ると、第1次ベビーブームに生まれた人達が出産適齢期に入り、増加傾向となった。

昭和50年には2を下回り、以降50年代後半を除き低下傾向が続いている。

*人口置き換え水準は、人口が将来にわたって増えも減りもしないで、親の世代と同数で置き換わるための大きさを表す指標である。人口置き換え水準に見合う合計特殊出生率は、女子の死亡率等によって変動するので一概にはいえないが、日本における平成13年の値は2.1である。